

IHJ伝統文化シリーズ⑧

日本列島を歌う—民謡の夕べ

クリストファー・ブレイズデル
国際文化会館芸術監督

2010年3月26日、「IHJ伝統文化シリーズ」の第8回、「日本列島を歌う—民謡の夕べ」が国際文化会館にて開催されました。このシリーズは、日本の一流の伝統文化を在日の外国人にのみならず、自国の文化にあまり触れるチャンスのない日本人にも紹介する企画です。今回のコンサートでは民謡研究家であり津軽三味線の名手である高橋祐次郎氏をはじめとして、佃一生氏(尺八)、成田武士氏(歌)、須藤圭子氏(歌)と高橋祐貴恵氏(太鼓)など、日本を代表する民謡奏者が各地の民謡を披露しました。

音楽はおおむね声楽(歌、語りなど)と器楽(弦楽器、管楽器および打楽器)の二種類によって構成されていることは世界共通です。日本の伝統音楽もその両方を備え、それぞれが深い歴史を誇りますが、昔から声楽が圧倒的に多く、日本の音楽全体の約9割を占めてきました。日本人が歌を愛しているという事実は、歌舞伎、能、長唄や常磐津などの歌を中心の伝統的な舞台芸術から理解できるでしょう。つまり、歌は日本音楽の「魂」であると言っても過言ではありません。

北海道から沖縄まで、日本の津々浦々に多くの民謡が存在しますが、民謡という音楽の主役はも



もちろん歌です。「民謡」という言葉はドイツ語の“volkslied”、または英語の“folk song”的訳語として明治時代から使われてきましたが、それ以前は風俗歌、里謡、俗謡、田舎唄など歌の目的と内容によって異なる呼称が用いられ、分類されていました。

民謡の特徴の一つは、その土地に住んでいる人々の日常生活と密接な関係を持っている点です。最も古い民謡は、自然に宿る神々を祀る信仰の歌、つまり豊作や豊穣を祈願し、漁や狩猟における安全を祈願するための歌であったと考えられます。

民謡は歌う目的と内容によって分類されています。たとえば宗教的なものから田植え歌、漁労歌、木遣歌、狩猟歌などの作業歌、踊り、座敷芸、祝祭、そして求愛の歌に代表されるような社交的なもの、商業化された娯楽などさまざまです。いずれも一般の人々の生活と切っても切れない関係です。また、民謡は伴奏なしの歌だけのものもあれば、三味線、尺八や太鼓の伴奏を伴うものもあります。

現在の民謡奏者の多くは全国の民謡大会やラジオ、テレビなどに出演したりする演奏活動と、演奏法を指導する教授活動の両方で生計を立てています。つまり、プロフェッショナルと言えるでしょう。しかし、昔、民謡を歌っていた人は、いわゆる一般市民で、自分たちの生活に密着した内容、目的で歌っていたので、プロ意識があるわけではありませんでした。作業歌、いわゆる「work songs」は農民、猟師、漁師などの産業革命以前のきつい肉体労働に従事する人々によって歌われていました。声を出し、リズムに乗って仕事をすることで、少しでも仕事の苦労を和らげようとしたのでしょう。また、求愛歌は若者が異性と知り合う機会を与えていました。歌による出会いは周囲の社会にも認められたものであり、多くの場合、結婚まで発展しました。つまり、民謡は単なる個人的行為ではなく、共同社会に参加する一つの「儀式」だったのです。

しかし労働のあり方とコミュニティの形態が変わった現代社会では、仕事を和らげるための歌の必然性がなくなりました。若者の交際も自由になり、昔のように恋愛を歌で表現することもなくなりました。しかし、生活から民謡の必然性がなくなったといつても、民謡が消失してし

まったわけではありません。地方の芸能文化財として、保存会によって次の世代に伝承すべく守られています。

日本の民謡は内容的に喜怒哀樂に満ち、それぞれの地方の特徴がふんだんに盛り込まれています。公演で演奏された曲目を例に、それぞれの民謡の特徴を見てみましょう。

高橋氏らが公演の最初に演奏した『じょんがら節』は津軽地方を代表する演目で、脈拍のようなビートと変化に富んだリズムを持ち、津軽三味線の魅力を最大限に引き出しています。

次の『江差追分』は、もともと長野で牛・馬追い歌として歌われていましたが、北前船を通じて当時栄えていた北海道の港町、江差まで伝わりました。『江差追分』にはさまざまなバージョンがあるのですが、拍のない、フリーリズムの箇所で歌と尺八が絡むのが特徴です。江差から、さらに全国の様々な地方に広がり、今や日本を代表する民謡の一つです。

『宮城馬子唄』は馬を市場へ連れて行く際、馬子が歌ったもので、尺八の伴奏を伴います。美しい旋律に乗りながらも、尺八と歌は、微妙に旋律をずらしながら先へ進んでいきます。まるで、青空を飛ぶ二羽の蝶のような、着かず離れずのメロディーが特徴的です。

『ソーラン節』は、皆さんもご存じのように北海道の代表的な民謡で、ニシン漁のために冬の海へ出る漁師たちに歌われていました。大荒れの冬の海で、一定のリズムに乗って力強く歌うことで、危険に満ちた辛い仕事も多少は楽になったものと思われます。

『ソーラン節』や『じょんがら節』のような力強い歌だけではなく、より穏やかで優しいメロディの歌や沖縄、九州、奄美地方の陽気で明るい歌、例えば、有名な九州地方の『五木の子守歌』も披露されました。

日本で、一流の奏者によるこのような幅広い民謡の生演奏を一度に楽しめることは、極めて珍しいことです。観客は高橋祐次郎氏の素晴らしい演奏だけでなく、彼が国内外で行った民謡コンサートにまつわる、ユーモアに満ちたエピソードを堪能し、最後は参加者全員の合唱で幕を閉じました。